

2 コホート検討会

コホート検討会は、結核治療におけるコホート分析から中断・治療失敗の原因や患者支援のあり方を検討し、結核治療の向上を図ることを目的に実施している。全肺結核患者を対象に、検討内容を医療機関に還元・地域連携の強化を図ることを目的に地域医師会医師が参画している。

平成 26 年度は、各区保健福祉センター（西成区を除く）は各 3 回、保健所・あいりん特区、西成区保健福祉センターは各 6 回、計 81 回実施した。

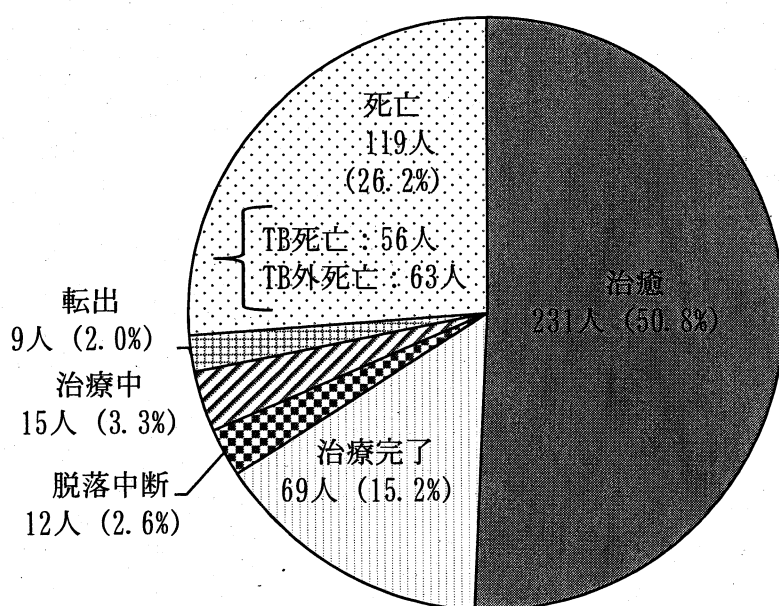
（１） 平成 26 年新登録肺結核患者の治療成績 （平成 27 年 12 月末現在）

ア. 喀痰塗抹陽性肺結核患者

※ 治療成功：治癒＋治療完了

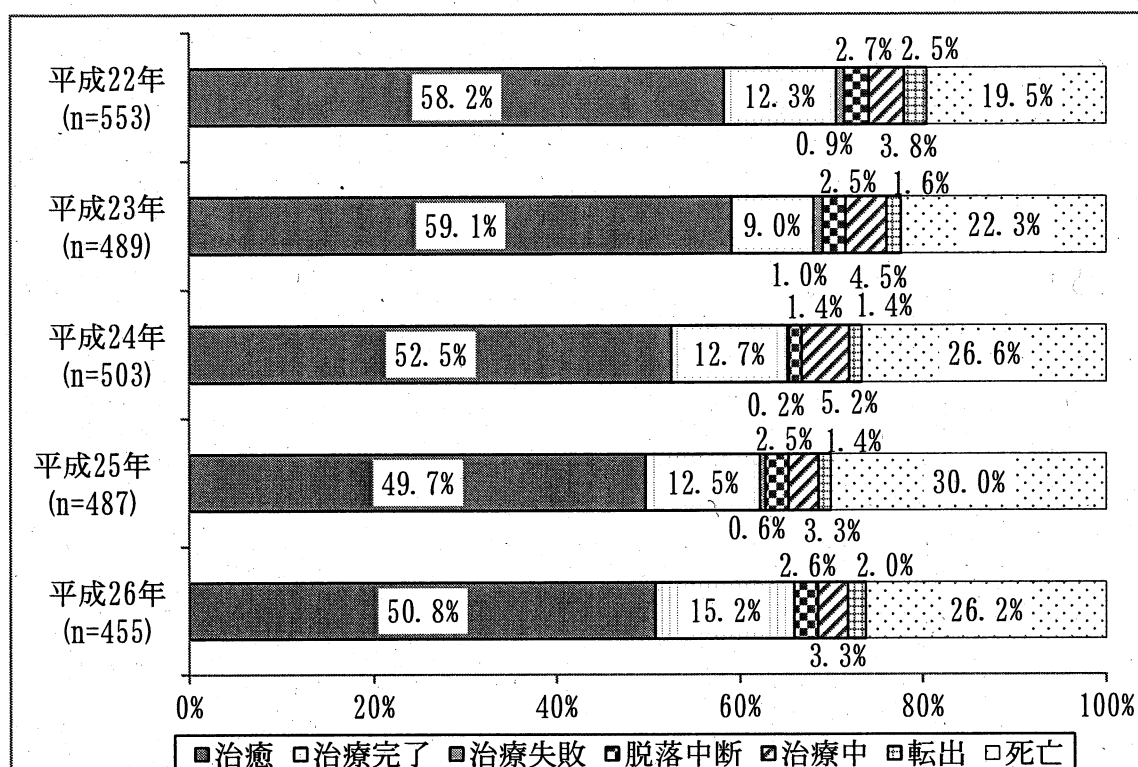
○治療成績

平成 26 年新登録喀痰塗抹陽性肺結核患者 456 人中、転症削除 1 人を除く 455 人について検討した。



コホート分析による治療成功は 300 人〔治癒 231 人、治療完了 69 人〕（65.9%）、脱落中断 12 人（2.6%）、死亡は 119 人〔結核死亡 56 人、結核外死亡 63 人〕（26.2%）であった。転出・死亡 128 人〔転出 9 人・死亡 119 人〕を除くと、治療成功割合は 91.7%、脱落中断割合は 3.7%、治療中は 4.6%であった。

○治療成績の推移

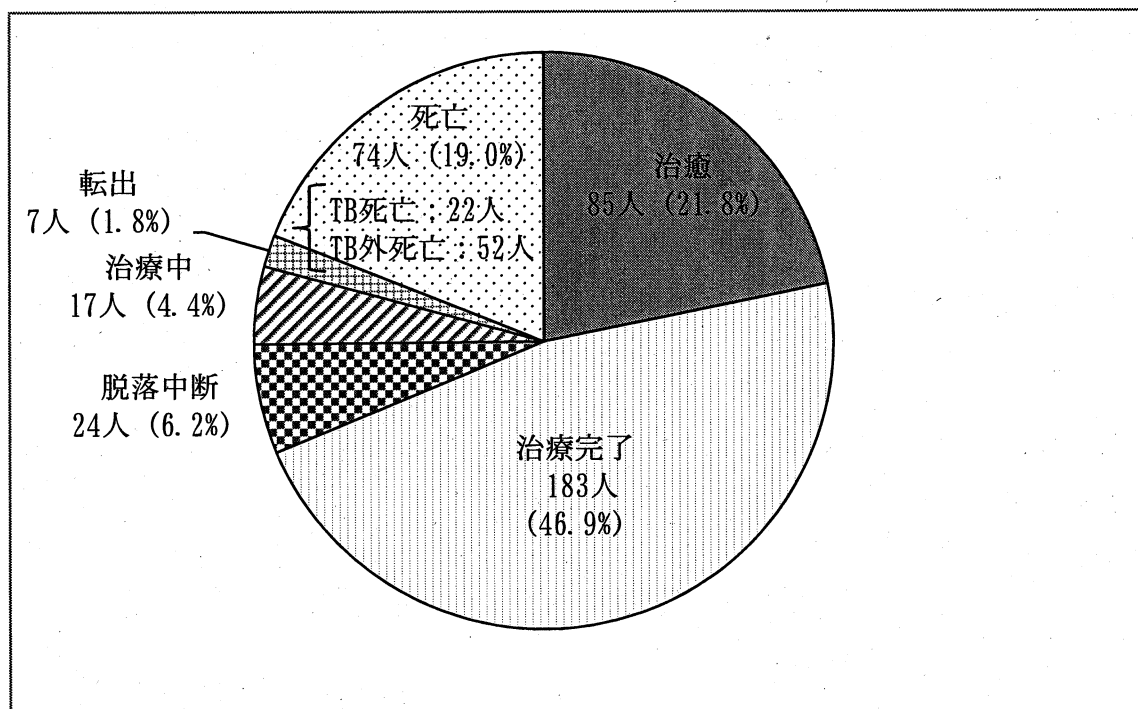


平成22年から平成26年まで5年間の治療成績の推移について、治療成功の割合は平成22年から平成24年までは減少傾向になっているが、平成24年以降は横ばいとなっている。これは、死亡が平成22年から平成24年までは増加傾向であったが、平成24年以降は横ばいであるためと考えられる。

脱落中断は、2%台で推移しており、平成26年は治療失敗が0人であった。「結核に関する特定感染症予防指針」に示されている「治療失敗・脱落中断率を5%以下にする」という目標は達成できていた。

イ. 喀痰塗抹陰性肺結核患者

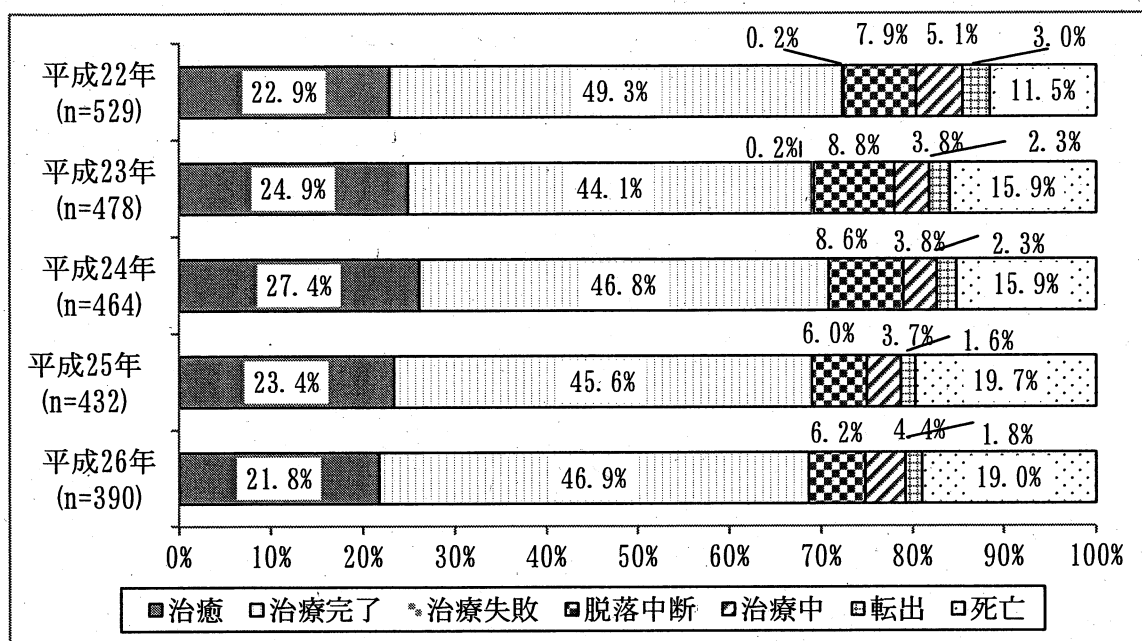
平成 26 年新登録喀痰塗抹陰性肺結核患者 392 人中、転症削除 2 人を除く 390 人について検討した。



コホート分析による治療成功は 268 人[治癒 85 人、治療完了 183 人] (68.7%)、脱落中断 24 人 (6.2%)、死亡は 74 人[結核死亡 22 人、結核外死亡 52 人] (19.0%) であった。

転出・死亡 81 人[転出 7 人、死亡 74 人]を除くと、治療成功割合は 86.7%、脱落中断割合は 7.8%、治療中は 5.5%であった。

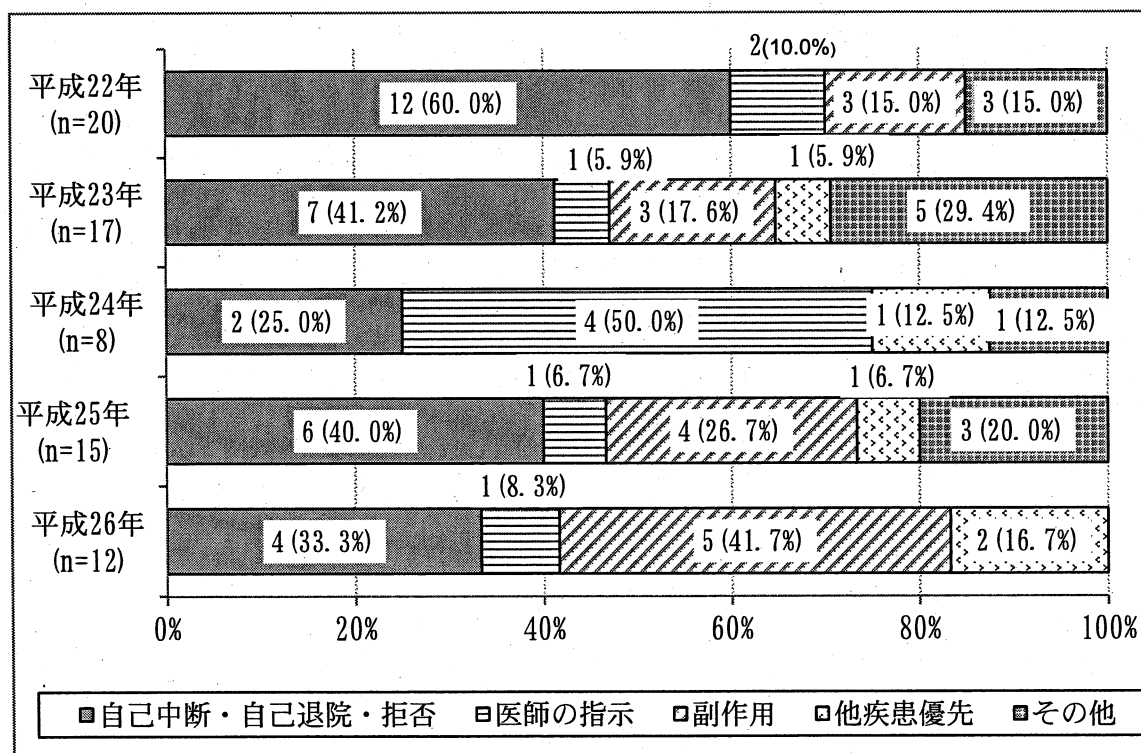
○治療成績の推移



コホート分析による治療成功割合は、平成22年から平成26年にかけて70%前後で推移していた。治療失敗は平成24・25年に引き続き0人、平成25年から脱落中断は6%台、死亡は19%台であった。

(2) 失敗中断の内訳

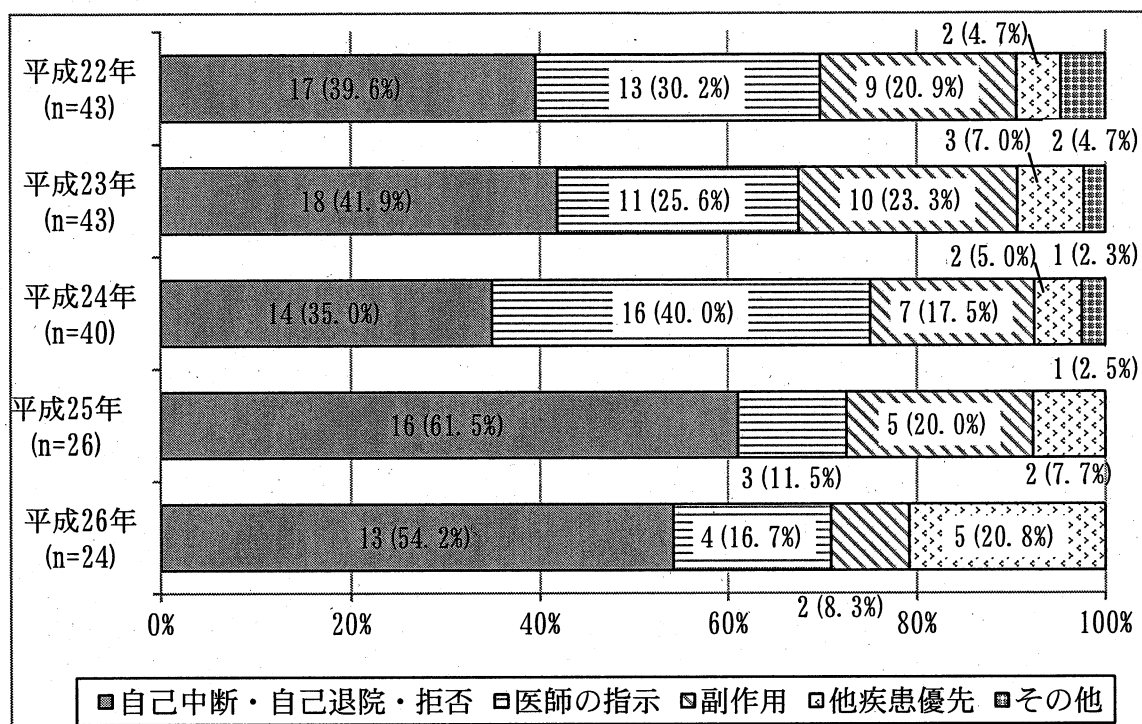
ア. 喀痰塗抹陽性肺結核患者



平成 26 年の失敗中断は、「副作用」が 5 人と最も多く、次いで、「自己中断・自己退院・拒否」が 4 人、「他疾患優先」が 2 人、「医師の指示によるもの」が 1 人であった。

平成 22 年から 26 年にかけての治療失敗・脱落中断の数は 20 人から 12 人で減少していた。

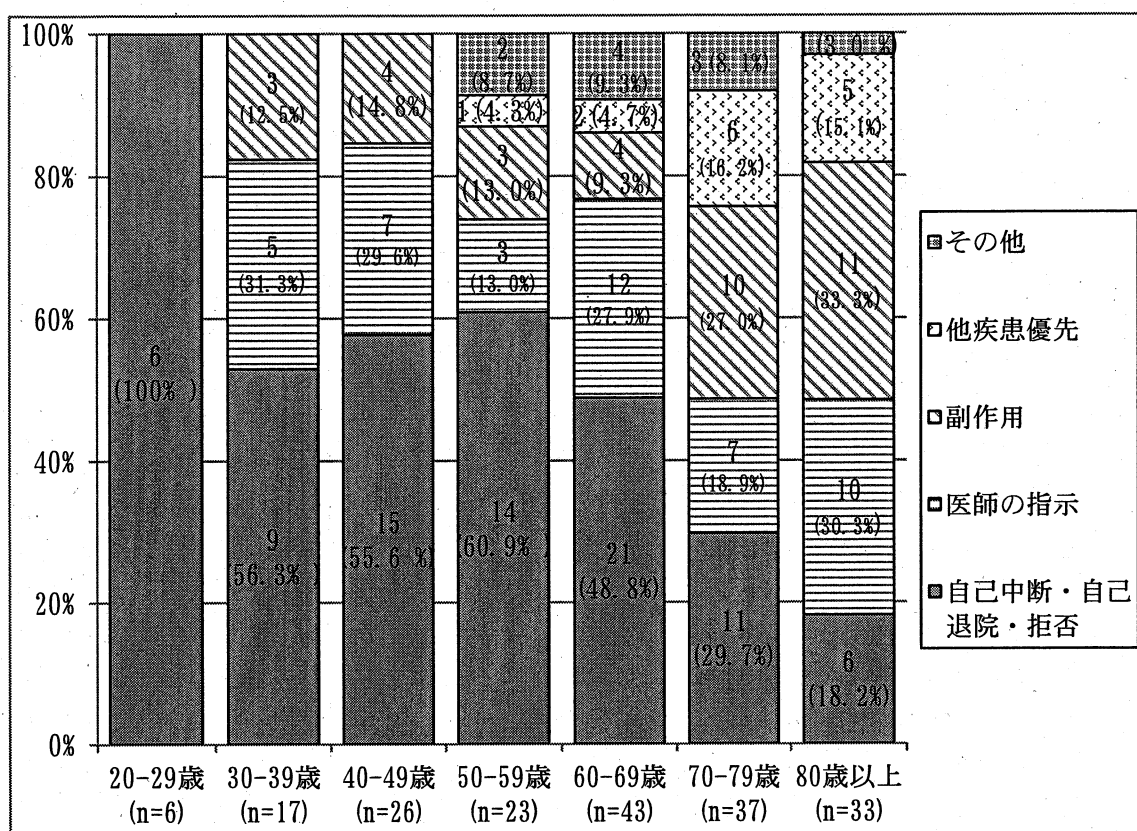
イ. 喀痰塗抹陰性肺結核患者



平成 26 年の失敗中断は 24 人で、「自己中断・自己退院・拒否」が 13 人 (54.2%)、「医師の指示によるもの」が 4 人 (16.7%)、「副作用によるもの」が 2 人 (8.3%)、「他疾患優先」が 5 人 (20.8%)、「その他」が 0 人であった。

平成 22 年から平成 24 年は、40 人台で推移していた中断者数が平成 25 年から 20 人台と減少していた。

○平成 23～26 年 年齢別治療失敗・脱落中断の内訳の状況



20 歳台から 50 歳台までについては「自己中断・自己退院・拒否」が、中断理由の 50% 以上を占めていた。また、年齢が高くなるにつれ、「副作用」および「他疾患優先」の割合が高くなり、70 歳台で 43.2%、80 歳以上で 48.4%を占めていた。

年代により中断理由等が異なることから、支援方法を検討するうえで年代も考慮し、1 人 1 人のリスクアセスメントを適正に行い、その患者さんに合わせた DOTS を導入し、治療成功へ導く必要がある。